

# トルレス神父記念広場

平成26年3月  
荅北町教育委員会

## イエズス会

カトリック教会の男子修道会で、イグナチオ・ロヨラを頭にフランシスコ・ザビエルなど、7名の同志によって1534年に創立されました。会は、ローマ教皇に忠誠を誓い、ポルトガル王室の保護を受けて、世界各地で布教活動を行い、優秀な宣教師を派遣しました。日本でも、盛んに活動しましたが、江戸幕府が「キリスト教禁止令」を出したことで、17世紀半ばに、一旦、活動を終わりました。



## トルレス神父とその偉業

1497年にスペインで生まれました。司祭となって国を離れ、東南アジアの島でザビエル神父に出会ったことで、運命が決まりました。共に、インド西海岸のゴア(ポルトガル領で、会のアジアにおける重要な根拠地)に渡り、入会しました。

天文18年(1549)8月15日に、日本布教長になったザビエル神父と共に、薩摩に上陸して、我が国に初めてキリスト教を伝えました。翌年、一行は、天皇や将軍から宣教活動の許可を得るために、京都を目指しましたが、途中で分かれて、肥前の平戸に残り、松浦氏の庇護を受けました。

天文20年(1551)11月に、ザビエル神父が日本を離れると、二代目の日本布教長になり、その後、20年近くの長きにわたり、布教活動に従事しました。



当時の日本人によって描かれた「南蛮船」の絵をもとに作図しました。

ポルトガルでは、「ナウ号」と言いました。全長30～60m、全長と全幅の比は3:1、排水量200～300t、3～4本のマストを備え、丸みを帯びた船体をしています。

ザビエル神父の精神を受け継ぎ、日本人の資質を高く評価して、宣教師達には日本文化に根ざした生活スタイルを求めました。これを「適応主義」と呼びます。日本人と同じ食べ物で、着物姿で過ごし、同じ所で眠ることを理想としました。神父自身の生活の一端が伺える逸話が残っています。バラレツジョ神父が「南蛮船」で志岐にやって来た時の事です。中食に招待しましたが、メニューは「甚だ黒き米と、塩辛き魚少々、それに味噌汁少量」でした。

後続の宣教師の育成に力を注ぎ、日本人の協力者を養成して、信徒の世話も行いました。仏教や日本文学も、熱心に研究しました。仏僧との討論も行い、『平家物語』などを写本しました。念願の京都布教にも着手して、ガスパル神父などを派遣しました。

こうした献身的な活動は実を結び、山口や九州各地でキリスト教が広まっていきました。

永禄年間(1560年代)に入ると、ポルトガルやスペインとの貿易による利益に注目して、洗礼を受ける大名や領主が出てきました。永禄6年(1563年)には、肥前の大村純忠に洗礼を受けました。このような状況になると、臣下の者や領民の改宗が大幅に進み、各地で、教会堂・病院・神学校が建てられました。修道士が不足すると、日本人の平信徒に権限を与えました。布教活動と不可欠の関係にあった南蛮貿易の拠点として、長崎港の開港にも尽力しました。戦国時代の戦乱は、布教活動に大きなマイナスでしたが、織田信長によって政治的な安定がもたらされると、畿内での活動が軌道に乗りました。一方、政情不安が続いた九州では活動が困難でした。それでも、日本布教長として、各地で活動を続けましたが、さすがに疲労の度合が濃くなり、最後は、この志岐の地で過ごして、元亀元年(1570)に73歳の生涯を終えました。ザビエル神父の夢を実現させたのが、トルレス神父でした。

## 天草にキリスト教が伝わる

当初、志岐城主の志岐鎮経(麟泉)は、日本布教長であったトルレス神父に来島を要請しました。その結果、神父の命を受けて、アルメイダ修道士が派遣され、志岐は天草で、初のキリスト教の伝来地になりました。鎮経は、洗礼を受けて「ドン・ジョアン」と称しました。永禄11年(1568)には、トルレス神父が志岐の地を踏み、鎮経を初めとして、信徒達から大歓迎を受けました。以後、キリスト教は、志岐を中心に、天草全土へ広がり、「天草は、キリシタンの島」と呼ばれるようになりました。

同年7月には、トルレス神父を中心にして、志岐で、「第1回宗教会議」が開かれました。九州各地の宣教師を召集した会議でした。続いて、元亀元年(1570)5月には、カブラル神父に日本布教長職を譲って、「第2回宗教会議」が開催されました。この時は、大方の神父(国内在)が、志岐に集合としたと伝えられます。この時期、志岐が、日本布教の中心地であったことが分かります。

## トルレス神父の死

「第2回宗教会議」が終わった年の10月に、トルレス神父は、志岐の地で亡くなりました。神父の死は、多くの人々を深い悲しみに巻き込みました。優れた聖職者に相応しく、葬儀は荘厳に執り行われました。対岸の口之津からも、多くの信徒が集まりました。追悼式とミサは、日本語による説教が行われ、「働く人は、その報いに価する」という聖書の言葉が引用されました。埋葬後は、衣類に至るまで、神父の教訓を記念する遺物として寸断され、信徒が持ち帰りました。

神父が亡くなると、翌年に志岐鎮経は、突如として棄教しました。志岐には南蛮船が着岸するに適した港がなく(近世にいたるまで、志岐の沖に船が停泊して、渡し船で荷を運んでいました)利益が少なかったことが、原因と思われます。一方で、アルメイダ修道士は、河内浦の天草氏にもキリスト教を伝えていたので、豊臣秀吉が天正15年(1587)に「バテレン追放令」を發布するまで、天草の信仰は、順調に続いていきました。

## 志岐鎮経(麟泉)

鎮経は、歴代志岐氏の中で最大の勢力を誇りました。天草五人衆のリーダー的な存在で、鎮と麟は、大友義鎮(宗麟)からの拝領です。大友氏から、大きな影響を受けました。豊臣秀吉の九州平定後は、秀吉の配下となって領地を安堵されました。天正17年(1589)の宇土城普請では小西行長の命令に服さず、他の天草衆も同調して、「天草合戦」になりました。鎮経は袋湾へ進軍した行長軍を、夜襲で打ち破りましたが、最後は、小西・加藤清正の連合軍から志岐城を破られて、薩摩に逃れました。



志岐氏家紋  
(丸の内並び鷹の羽)



伝・志岐麟泉の鞍  
(キリシタン館所蔵:天草市)

## 志岐城跡とトルレス記念広場

天草五人衆の城では、最大規模の面積を持つ山城で、「城平」と「城山」の字名が残っています。城平が、城跡の本体部分で、城山は、詰めの城などの周辺部にあたります。本丸の南東下に残る堀切は、尾根を大きく断ち切っており、北側は堅堀に変化はして、志岐川近くの裾部まで下っています。平時は、通路としても利用されたようです。城には、本丸・二の丸・馬攻め場・出丸などの呼び名がついた区画もあります。

城下集落は、志岐城の城下町でした。「城下」・「陣内」の字名をはじめ、「葦屋敷」などの呼び名が残っています。

トルレス神父記念広場は、城跡と集落の接点箇所に、設置しました。志岐川は、水濠の役目を果たしたと思われます。広場のあたりを「橋口」と呼びますので、橋が架かっていた可能性があります。このことから、大手口とも推定されます。これを裏付けるように、対岸の一面には、土塁と空堀が残っています。





A: 麟泉公を祀る石祠



B: 本丸



C: 二の丸



D: 出丸



E: 堀切



F: 土塁と空堀  
(トルレス神父記念広場対岸)

